

(様式 1)

令和 7 年度 学力向上を図るための全体計画

学校名	墨田区立両国小学校
校長名	山崎 隆

1 本校の学力に関する状況

(1) 墨田区学習状況調査結果から

成 果	課 題
・全ての学年、領域で全国平均をほぼ上回る。 特に第 4 学年は、4 教科ほぼすべての観点で全国平均を 10 P 以上上回る。 ・観点別で状況が良いのは、国語の「思考・判断・表現」、社会の「知識・技能」「思考・判断・表現」、理科「思考・判断・表現」で、全学年で全国平均を 5 P 以上上回る。算数「思考・判断・表現」は 4 つの学年で全国平均を 5 P 以上上回る。 ・基礎・活用別では、全ての学年で全受検教科の平均正答率で全国平均差が基礎より活用が上回る。 ・教科全体の経年変化で伸びているのは、4 年国語・社会・算数・理科、5 年社会である。 ・D・E 層の割合の経年比較では、2 年国語・算数、4 年全教科、5 年社会・算数、6 年社会・理科で減少している。特に 4 年社会・理科は 18 P～20 P で大幅に減少している。	→ 6 年理科の「知識・技能」平均正答率は全国平均とほぼ同じで、他の教科と比較して数値が低い。 ・領域別で、国語「書くこと」の平均正答率は、2、3、4、6 年では全国平均より 15 P 程度上回るが、5 年では 3 P 程度にとどまる。算数においては、3、5 年「データ」、2、3 年「数と計算」で 3 P 程度にとどまり、他領域に比べて低い。6 年理科「生命・地球」で全国平均と同程度である。 → 基礎・活用別では、5 年社会で基礎より活用が下回る。 → それ以外はプラス、マイナス 1 P 程度で推移し伸び悩んでいる。 ・同比較、3 年国語・算数、5 年国語・理科、6 年算数・英語では上昇し、割合の減少に至っていない。

(2) 意識調査結果から

成 果	課 題
・「テストで間違えた問題を後でやり直している」の肯定率は 2～5 年で 84.0 P～91.4 P の範囲内で、全国平均を上回る。 ・「ノートの取り方について自分なりの工夫をしている」の肯定率は 5 年 83.1 P、3 年 80.2 P で、全国平均より 7.5 P 上回る。 ・「タブレット端末等を使って話し合い活動が深まる」の肯定率は 4 年 65.4 P、5 年 73.4 P、6 年 78.8 P と学年進行に伴い上昇傾向にある。	→ 6 年で 72.5 P と全国平均を 2 P 下回る。取り組みを徹底し習慣化を図りたい。 → 4 年の肯定率は 69.1 P で、5 年より 14 P、全国平均より 1.1 P 下回る。 ・「考えたり頭を使ったりすることが好き」の肯定率は 4 年 59.3 P、5 年 65 P に対して、6 年 51.3 P と 5 割台前半にとどまる。

・「話し合いをするとき自分の意見を積極的に発言している」の肯定率は5年 74.7P、6年 75.0Pで、ともに全国平均を上回る。 ・「友達の意見を聞いて新しいことに気付いたり自分の考えが深められたりして面白い」の肯定率は6年 73.8Pで、全国平均を6.5P上回る。	→4年の肯定率は65.4Pで、5年より9.3P、全国平均より6P下回る。 ・「不思議だな、どうしてだろうと思ったことを調べている」の肯定率は、学年進行とともに低下し、3年 70.4Pに対して6年 57.5Pである。
--	--

(3) 墨田区学習状況調査や意識調査以外から明らかになっている学習に関する状況

成 果	課 題
・話すことに自信をもてるようになってきている。校内研究の常置活動として朝学習の時間にペアやグループでの話し合い活動に定期的に取り組んだことがその要因と考えられる。 ・学習のまとめで、条件付き作文指導をするなど、自分の考えをもつ、表現することなどを重視した学習を繰り返し実施したことで、書く活動への抵抗感が少なくなっている。 ・算数の基礎基本の力がついてきている。朝学習やピンポイント学習、授業中の習熟を図る場面で、ふりかえりシートを活用して繰り返し復習を行ったり、計算練習を行ったりした。 ・DE層の減少が見られる。ミライシードやふりかえりシートの継続的活用や、特に社会科、理科においては地図帳の活用やグラフや図表の読み取り方の確認を丁寧に行ったことが要因だと考えられる。 ・ほとんどの児童が宿題を提出することができおり、家庭で学習する習慣が身に付いている児童が多い。	→自信をもって発言する児童と、そうではない児童がいるので、発問や発問前の机間指導を工夫していく必要がある。 →活発に発言するが思いつきの発言も多く、考えをよりよくしたり深めたりすることが苦手である。 ・時間内に課題をやりきることを繰り返し指導し、最後まで粘り強く取り組むことができるようにしていきたい。 ・教科ごとの正しい語彙や学習した用語が定着していない。 ・情報の整理や関連付け等、複数の資料をどう扱うかの指導を重視していくことが必要。 →一部の児童が家庭で宿題に取り組むことができていない。休み時間や放課後の時間を利用して補習を行い、学力の定着を図りたい。 →作業的に取り組むのではなく、自分の力が伸ばせるように丁寧に取り組もうとする姿勢を育てていく必要がある。

2 本年度の学力向上に関する主な取組

上記の状況を踏まえ、本校がこれまで継続してきた「両国小・学力向上6つのチャレンジ」を年度始の保護者会で提示し、全校で取り組む。P T Aや地域の方にご協力いただき、全学級の児童机・椅子の脚部分にテニスボールを装着し、消音効果を高めて聴覚刺激を低減し、学習に集中できるようにした。

(1) 必ずテスト直しをすること（高学年では自己分析と学習計画も）

全学級で取り組んだはずであるが、「いつもやり直している」という意識の児童は学年進行するにつれて低下している。「やらなくても済んでいる」状況があり、個人差・学級差が生じている。第5・第6学年においては、直すだけでなく、誤答の原因を分析させ、そのためにどのような学習が必要なのか、主体的に計画を立てられるように指導する。

(2) 辞書をいつでも引けるようにすること

3年生以上は一人一冊、自分の国語辞典が教室内にあり、国語以外の時間にも必要な時には使えるようにしていると同時に、家庭にも呼びかけ、辞書に親しむ環境を整えている。高学年の児童の語彙力は極めて高いので、他学年にも波及できるように、さらに習慣化するように指導する。低学年については自分で辞書を引くことが難しいので、学級で語彙を増やせるような活動を行っている。

(3) 地図帳をはじめ様々な地図や地球儀等を活用すること

「いつでも地図帳を」を呼びかけ、机の中にいつでも地図帳を入れておき、社会科の授業に限らず地名を見たらすぐに地図帳で調べるようにしている。また、タブレット端末で地図パズル等のアプリを使えるように環境を整え、児童が楽しく地図に触れる場面を増やすようにする。地球儀も身近に置き、活用を図る。

(4) 理科実験O J T及び理科室や学校園等の理科学習の環境整備

これまでと同様に「理科実験O J Tの実施」「理科室及び準備室等の環境整備」等、理科学習の充実を図る。特に「理科実験O J Tの実施」においては、実験における安全管理を最大の重点としつつも、理科の問題解決型学習の進め方についても共通理解を図り、授業力の向上を目指す。

(5) 「両国小 板書・ノート作りの手引き」の活用と加除修正

「両国小 板書・ノート作りの手引き」を学力向上委員会と国語・社会・算数・理科担当が協働で作成し、全教員に配付された。その手引きをタブレット端末内で常時閲覧でき、授業改善に活かすことで、全学年の板書やノート指導が充実してきた。さらに、加除修正を加え共通理解を図る。

(6) 「ピンポイント学習」の継続実施

各学年の苦手分野を朝学習で一斉に取り組む「ピンポイント学習」（月1回）を確実に実施したことにより、学力状況調査の結果に結びついた。調査結果の分析を基に苦手分野を明らかにすることとともに、全学級が同時に「ピンポイント学習」に取り組み、継続することが更なる成果を生み出すことになる。

(7) 校内研究の取組

校内研究では、研究主題を「自分の考えをもち、伝え合う児童の育成」、副主題を「『ひと・まち・つながる』学びを通して」とし、研究を深めていく。本校では「伝え合う力」を「互いの立場や考えを尊重し、言語を通して正確に理解したり適切に表現したりする力」と定義し、生活科、社会科、総合的な学習の時間で授業研究に取り組む。また開校 150 周年と関連し、地域の人的・物的資源を活用しながら、地域連携の様々な取組を進める。教科等横断的な視点で組み立てたカリキュラム・マネジメントを推進することができるようにする。

3 「令和 8 年度 墨田区学習状況調査」における目標

(1) 目標

- ・ D・E 層を C 層に引き上げること。B 層の上位を A 層に引き上げること。
- ・ 意識調査において、「テスト直し」「自分で調べる」の完全定着を全学年 8 割以上に高めること。
- ・ 令和 7 年度の学習状況調査で平均正答率が低かった問題を「ピンポイント学習」で克服すること。